第3回　九州森づくり交流会
in ながさき　報告書

主催：九州森づくり交流会・実行委員会
共催：ふくおか森づくりネットワーク、地域循環研究所、第１３回森林と市民を結ぶ全国の集い実行委員会

■概要

【事業名】第３回　九州森づくり交流会 in ながさき

【目的】九州の森づくりや林業に関心のある人が集い、交流を深める。

【内容】下記募集要項に沿って実施。

【日時】2008 年 2 月 2 日（土）13 時～3 日（日）12 時

【場所】ながさき県民の森

【参加者】21 名（途中参加あり）

【主催】九州森づくり交流会・実行委員会

【共催】ふくおか森づくりネットワーク、地域循環研究所、第 13 回森林と市民を結ぶ全国の集い実行委員会

■募集要項

長崎にて第３回九州の森づくり交流会を開催いたします。
大自然に包まれた県民の森宿泊所にて、九州内の森づくりについて語り合いましょう！
当日は、森の視察や懇親会も予定しております。ふるってご参加下さい。

２月２日（土）

12：00　受付開始
13：00　開会挨拶、オリエンテーション
13：20　自己紹介
14：00　現地視察　案内：森いくぞう会
　現場１「列状間伐現場」
　現場２「生産森林組合の収入間伐現場」
　現場３「真樹販売㈱の森林経営」
　現場４「間伐手遅れ林分」
　現場５「ボランティアにより間伐した現場（風倒被害）」
16：30　事例紹介
　事例１「ふくおか森づくりネットワークの活動」
　話題提供：志賀壮史
　普及啓発、技術交流、人材育成、大イベントなど、森林ボランティア団体同士が手をつなぐことでできるようになったことを紹介。
　事例２「森づくりボランティアネットの取組み」
　話題提供：藤本浩二
　森づくりボランティアを増やし、団体や人材を育成している熊本県の取組みを紹介。
　質疑応答とディスカッション
18：00　夕食
19：00　懇親会

２月３日（日）

6：30　朝の森林散策（任意）
8：00　朝食
9：30　事例紹介
　「ながさ木の家づくり（予定）」
10：00　ワークショップ
　「地元の森のサポーターを増やす 100 のアイデア・企画会議」
11：30　全体ふりかえり
12：00　閉会

■お問い合わせ・参加申し込み■
下記までメール又はFAXでご連絡下さい。
NPO法人　地域循環研究所（担当：力武）
〒852-8521
長崎市文教町 1-14
長崎大学共同研究交流センター27 研究室
TEL：095-819-2866　FAX：095-819-2867
E-mail：ma_rikitake@junkan.org

2/2（土）
現地視察

長崎市のボランティア団体「森いくぞう会」代表の白石氏の案内により、県民の森周辺計６ヶ所を視察した。

現場０「通りすがりの皆伐現場」

最も搬出コストがかからない皆伐。しかし、皆伐後の再造林には費用、時間、手間がかかるため、現在皆伐を行うところは少ない。道の入れ方も技術力を要するため難しい。

現場１「列状間伐現場」

西彼杵郡琴海町戸根郷の山林では、列状間伐を行っている。長崎では大村森林組合が 10 年程前に列状間伐を導入したのをはじめとして普及していった。現在、長崎で収入間伐といえばほとんどが列状間伐を行っている。土砂くずれなどがおこりにくく、環境にも良い間伐方法なのでは。技術力もあまり必要とせず、簡単な点もメリット。

「熊本ではそこまで普及しておらず抜き伐りで行うところが多い。間伐方法は所有者の好みによると思うが、熊本県内の森林所有者においては列状間伐に対する意識は低いようだ。」（藤本氏）

2,469 本の搬出し、造林補助事業を活用して収入は 1,753,000 円。74 年生のヒノキが 1 本あたりおよそ 710 円という計算になる。木材価格はこれほど低下している。

現場２「生産森林組合の収入間伐現場」

琴海町戸根郷藤ノ尾では、列状間伐ではなく任意に選木して間伐を行っている。搬出コストは伐倒だけで考えると列状間伐の 1.5 倍になる。長伐期化にともない、これまで 35 年生までの間伐しか補助金の対象とならなかったが、10 年程前から搬出するという条件を満たされれば 40 年生以上の間伐も補助金の対象となるようになった。西彼杵半島は土質が肥沃ではなく成長が遅いため、40 年生以上でも間伐の対象となるような木が多い。補助金の対象となるようになり、整備を進めることができるようになった。

43 年生のヒノキで間伐面積 5ha、搬出本数 3,605 本。売り上げ 2,149,000 円（1 本あたり 596 円）に対し、間伐にかかった費用は 3,424,000 円（1 本あたり 950 円）、つまり 1,275,000 円の赤字となる。補助金 2,153,000 円をあてることで、878,000 円（1 本あたり 244 円）が所有者の受領額になる。

現場３「真樹販売㈱の森林経営」

ひぐちグループから独立した真樹販売㈱は、長崎県内で唯一森林経営を行っている企業である。ひぐちグループ時代に造林を行い、経営ができる状態になったため独立した。長崎県内には、松崎団地・外海団地・大瀬戸・西彼団地の３団地で合わせて約 280ha の森林を所有し、すべてＳＧＥＣの森林認証を取得している。

【枝打ちの技術】

7 年生ごろから 50cm～1m前後の枝打ちを 3 年サイクルで行い、直径 8cm以内に枝打ちを完了させることで、10.5cm、12cm角の芯持ち柱材でも無節材が取れるような作業を実施している。

現場４「間伐手遅れ林分」

木材の価格低下により、間伐が行き届かなくなった林分。これまで見てきた山林と違い、林内は暗く下草はほとんど生えていなかった。間伐されなかった場合の森林を実際に目で確かめ、その必要性を実感した。

現場５「ボランティアにより間伐した現場（風倒被害）」

白石さんが代表を務めている長崎県内のボランティアグループ「森いくぞう会」によって手入れされた現場。同会は月１回程、長崎グリーンヘルパーの会（協賛：九州電力）からの参加もあり毎回１０人前後で活動している。作業する場所は森林所有者から連絡があったり、こちらから森林所有者に話をもちかけたりする場合もあり様々。（こちらから連絡する際は怪しまれないように注意を払いながら）指導者の育成や組織作りの点で問題はあるが、助成制度を活用しているため資金面での問題は少ない。

事例紹介

事例１「ふくおか森づくりネットワークの活動」　　話題提供：志賀　壮史　氏

- ２００３年に設立。福岡県内の森づくりや、里山保全のための中間支援的な事業（団体や活動を元気付ける事業）を行う有志の集まり。それぞれが自分の出身団体を持つ有志の集まりだが、ネットワークの活動を効率的なものとなるよう心掛けることで、中間支援的な事業（ボランティアがボランティアを手助けする）を実施してくることができた。
- 関係するボランティア団体は、森づくりや里山の保全を通して、レクリエーションの場の提供、コミュニティづくりなど自然の中で楽しむことのできる環境づくりを行う活動をしている。

・　会議は時間を決めて行う、「可能」かつ「効果的」な事業を企画するなどを心掛けている。

・　ふくおか森づくりネットワークが設立した２００３年度に行った２つの事業、「森づくり活動グループリーダー講座」、「里山体験リレー」の２つの事例を紹介する。

①　森づくり活動グループリーダー講座

単独の団体ではリーダー不足や技術がマニュアル化されないなどの課題がある。ネットワークを通じてそれぞれがスキルを持ち寄りマニュアル化し講座を実施した。山仕事技術、安全管理、グループ運営等についてテキストを作成し、共通講座 1 回・実践講座 4 回を開催。これらに 100 名以上が参加した。

②　里山体験リレー

9 団体がそれぞれの活動日を「体験受入れ」の日に設定し、１枚のカラーパンフレットで全 9 回を紹介。まとめて広報することで参加の敷居を低くできた。参加者のべ 249 名のうち、なんと 100 名以上が初心者。メディアへの掲載を 19 回行い、広報活動にも力を入れる。

・　このほか、行政職員などを交えた「ふくおか里山ワークショップ」も開催してきた。また、ブログの「ふくおか森づくり日記」では、メンバー全員が活動状況などを掲載することができるようにし、情報の共有を図っている。

・　２００５年度より、九州の森づくりメーリングリストの管理者に。これまでに２回の交流会を開催。

・　２００８年３月に福岡市で全国シンポジウム「第１３回森林と市民を結ぶ全国の集い」の開催。

情報発信・入手や新規会員獲得など個別の団体で抱えている課題を、ネットワークという特性を活かしながら支援していく事業を展開しており、団体間の情報交換の場としての機能も果たしている。

事例２「森づくりボランティアネットの取組み」　　話題提供：藤本　浩二　氏

熊本県では、平成１７年度より「水と緑の森づくり税」が導入され、間伐による森林の公益的機能の発揮および県民参加の森づくりを推進している。森づくり事業をさらに推進するために森林ボランティア活動の総合的支援事業が必要とされるようになり、社団法人熊本県緑化推進委員会が「森づくりボランティアネット」を委託事業で行っている。

森づくりボランティアネットの主な業務は･･･
①森林ボランティア活動に関する相談・受付、助言、②現地指導、③リーダー養成研修、④初心者向け研修、⑤団体活動への助成、⑥道具の貸出し、⑦HPを活用した情報提供

【市民でできる森の健康診断】初心者向け研修として行っている事業の一部。
森の健康診断とは？
愛知県矢作川水系森林ボランティア協議会と東大演習林とで開発された。市民が簡単にできる森林調査の手法で、調査に用いる道具はほとんどが 100 円均一で購入することができる。

・　戦後植林された人工林の課題は手入れ不足で公益的機能が失われていること。しかし、それを体感したことはあるのだろうか？という疑問から健康診断を取組むことに。

・　のこぎりやチェーンソーを使わないので安全性が高い。

・　市民が森林の現状を体感してもらうのに適している。

健康診断の手順

１．まず、森を感じてみる

鳥や虫の声、風の音など人工林でも、人口林だからこそ感じることができるものがある。

２．人工林の植生調査

5m×5mの中で、①人工林の種類　②斜面の方向や傾斜角　③落葉層と腐食層　④草と低木　⑤植栽木以外の樹木を調べる。

３．人工林の混み具合調査

5.65mの半径で 100m^{2}の円を描く。その中で、①周囲の状況　②胸高直径　③樹高　④形状比　⑤１ｈａあたりの本数　⑥間伐率　⑦１ｈａあたりの胸高断面合計を調べる。

４．診断結果

２．３．の調査値より結果を考察し、健康状態を判断する。結果を踏まえて、間伐が必要などの診断書を出す。

今後は森林組合を通じて森林所有者から立ち入りの許可を得、健康診断を進めていきたい。

小さい木はノコギリでも切れる。大きい木は巻き枯らし間伐という手法をとればボランティアでも間伐可能。森づくりボランティアネットでは巻き枯らし間伐に 1 本 100 円の助成をしている。(所有者が許可せずあまり活用されていない。森林組合に営業補助をしてもらうなどの対応策が必要。)

今後の課題

- 既存団体の認知が難しい。活動内容を知らない、まだ知らない団体があるはずなのでそのような団体を拾い上げてネットワークをひろげていく。
- ボランティアネット自体の周知不足。ホームページ、Email をもっと活用し、ネットワークを構築していく。
- 森林ボランティア共通カードの導入。協賛団体を募り、1 回の活動に対し 1 ポイント押印する。10 ポイント獲得で認定書を贈呈など。

理想の形として、他のネットワーク（環境ネットや地域づくりネット、他県のネットなど）や個人との交流もできるネットワークづくりをおこなっていきたい。

夕食・懇親会

県民の森の食堂で､お酒も交じりながらの夕食。その後、一部屋に集まり、長い長い二次会へ。雑談のなかで、それぞれ新たな発見や思いがうまれる交流ができたのでは。

２/３（日）
事例紹介

「100 年の森構想実行委員会の取組み」　話題提供：神山　秀美　氏

2002 年佐世保市制 100 周年シンボルイベントの一つとして、市民からの公募が採用され、2000 年の秋に 100 年の森構想が始まった。35 人の実行委員のうち 7～8 人が事務局として活動。企業や宗教団体からの協力もある。

【なぜドングリを植えるのか？】

- 照葉樹は西日本の潜在植生である。
- 照葉樹林にはドングリを食べる動物が多く生息しており、ドングリがこれら動物の食物連鎖の底辺となっていることから、ドングリの森は西日本の生態系を作り上げる森と言える。
- スギ・ヒノキなどの針葉樹より深く根を張るため土地の崩壊を防ぎ保水力が大きいと言われている。
- 生物多様性の保存、二酸化炭素の吸収（幼木の森は老齢の森よりも成長段階で多く二酸化炭素を吸収する）など自然環境の維持・地球温暖化の防止としても寄与することができる。

【100 年の森構想実行委員会の活動】

① 秋には森に入ってドングリ拾い→苗畑で育苗（会員の皆さんにも育ててもらう）烏帽子岳にてインタープリンターなども含め 50 名程度が参加。

② 春になると中央公園の苗畑にて芽を出したドングリが育っていく。水撒きや草刈を行い、1～2 年後に山へ植樹できる大きさになるまで育てる。苗はポットを利用する。ポットは保温・保湿効果がありイノシシからの被害も防ぐことができる。今年は水不足で、水撒きしていると水がもったいないとの声をかけられ、会員や市民の方々が里親として苗木を預かり、各家庭で分担して育ててもらうなど、皆さんの協力があり継続できた。

③ 植樹祭。毎春、苗畑や皆さんに育ててもらった苗木を植樹する。毎年参加者多数、初回は 800 名もの参加があった。

④ 育樹祭。森は植えるだけでは育たない。植樹祭で植えた苗木が草の勢いに負けないようにその周りを刈り、手入れをしながら森を育てる活動も行っている。

★植樹祭には宮脇昭先生（横浜国立大学名誉教授：潜在植生の木を中心に、混植・密植型植樹によって森林が回復することを提唱）の講演会も開催している。タブの木 1 本で消防車 1 台の保水力があると言われており、漁民の方々からの参加も増えている。

まずは「やってみる」「言ってみる」こと！

- 広報はできるだけやってみる。参加人数は当日にならないとわからないが、できるがきりの広報でこれまで多くの人が集まった。
- 予算の半分は苗木。これまで、九州電力から苗木が、明治牛乳やパン屋さんからは飲み物やパンの提供があった。言ってみれば協力してくれる団体・人もいる。まずは言ってみる、やってみること。

ワークショップ「地元の森のサポーターを増やす 100 のアイデア・企画会議」

進行：志賀　壮史　氏

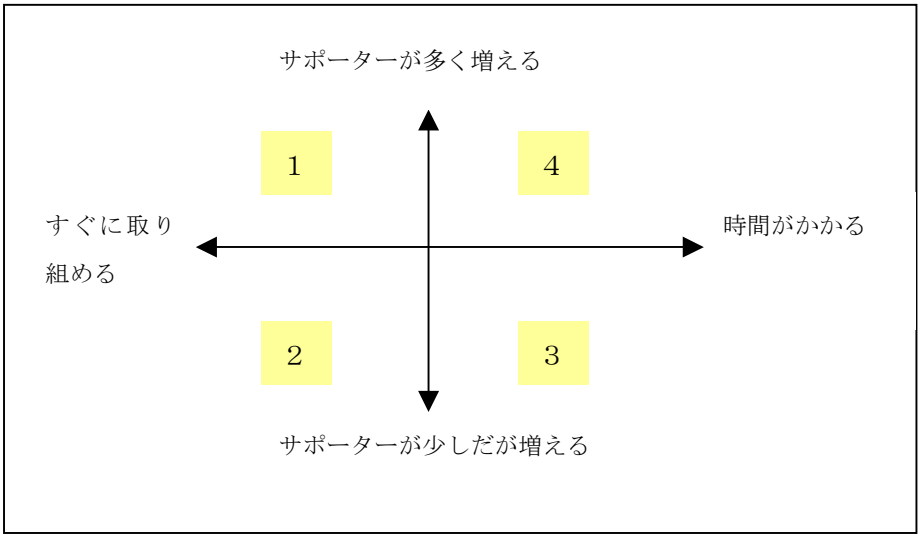
【ワークショップ手順】

①　森のサポーターにはどのような役割の人々がいるか考える。

⇒森の案内人、森林散策などイベント企画者、情報発信者、木材の消費者、森を整備する人、森林ボランティアなどが挙げられた。

②　森のサポーターを増やすためのアイデアを個人で考える。

③　グループをつくり、考えたアイデアを皆で発表しあい、次の図に従って振り分け、代表者が発表する。



【出されたアイデア】

1　について

・　県産材商品をブランド化する

・　森林保全活動のスケジュールを公開する

・　企業向けのパンフレットを作成し、企業による森林保全活動を促す

・　イベントを開催する。

企画内容として…地域の既存施設を活用する。例えば、県民の森はサイクリングに最適なのでイベントの目玉とすれば参加者が増えるのでは。他には、親子で参加できる内容、スケジュールなど参加しやすいイベントにするなど人が集まる工夫を。

・　地域性のある情報発信（ホームページやブログによる発信）

見やすく、多くの人が読む回覧板を応用してはどうか。助成金情報や活動団体などを紹介する。

・　有名人を目玉としたイベントやセミナーの開催

2　について

・　大学生のインタープリンターの養成。若い人の力を活かし、森林を身近なものにする。

・　親子で楽しめる交流イベントの開催

・　地域の資源を発掘する。
・　情報発信（地元の森の状況や自治体の政策など、まず知ってもらう）
・　苗木を育て、提供する
・　イベントの開催
　　まきストーブ勉強会、森林セラピー、バイオマスセラピー、森林ボランティア作業などの内容
・　既に森林保全活動を行っている団体から指導を受ける
・　自治会などに参加し、地域の人と仲良くなる。

3　について
・　森の案内人の登録制度を整える。
・　農家民泊体験ツアー開催
・　森林のファンクラブ創設
・　森林保全リーダーの養成

4　について
・　森林保全活動にポイント制度を設ける。
・　木づかいポイントなどの地域通過にしてはどうか
・　環境教育、木育の効果的なプログラム開発
・　ネットワークづくり
・　行政による森林ボランティア組織立ち上げのための支援
・　植樹祭の開催
・　核となる森林ボランティア団体をつくる
・　県産材表示制度をつくり、協力店を募る

このほか全体的に、
まず、知らせることの大切さ。若い人の力を活かす。自治会を活用することで安心なまちづくりにもつながる。これまでに出たアイデアを推進するために、森林関係者のみのイベントに限らず異業種の人へよびかける、中心団体をつくるなどが提案された。

～交流会を振り返って～　NPO法人　地域循環研究所　力武真理子

準備段階からなかなかスムーズに運ぶことができませんでしたが、皆さんのご協力のおかげで無事に終えることができました。参加していただいた皆様、ありがとうございました。「九州森づくりML」に参加さしてからまだ日は浅いですが、今回の交流会で福岡・熊本におけるネットワークの強みを活かした活動を学び、改めて“つながる”ということの大切さを感じました。森林づくりに関わる様々な役割の方と交流ができ、大変勉強になりました。今回の交流会で生まれたものを発展的に捉え、今後の活動につなげていきたいと思います。